

2018静岡総体を終えて

船橋市立船橋高等学校 体操部 大竹 秀一



このたび2018静岡総体において、2年ぶり5度目の団体優勝を果たすことができました。

今回の結果は選手自身の頑張りはもちろんですが、沢山の方の支えの中で達成できた事を、まずこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

今季の試合を振り返ってみますと、シーズン初戦・中盤の千葉県予選や関東大会では団体優勝しましたが、今一步目標とする点数に届かない状態でした。また主力選手の故障等で一抹の不安が残る中、インターハイ本番をむかえました。

インターハイは8/1に競技が開催される静岡に入り、8/4に予選、8/6に決勝という日程で行われました。予選では鉄棒でのミスが響き、大阪の清風高校につぐ2位通過となりました。予選の点差は1.5点であり、実力も拮抗。ミスの数が勝敗を分ける僅差の勝負になると覚悟を決めて挑んだ決勝となりました。決勝は予想通りの大接戦で、種目を重ねるごとに一進一退のシーソーゲームとなり、最後まで勝負がわからない展開となりました。そんな中、選手は自分たちのやってきたことを信じ、自信をもって堂々と演技することが出来ました。結果、市立船橋高校と清風高校は史上初の同点となり、団体優勝を飾ることができました。

選手たちは昨年インターハイで最終種目のミスが響き、あと一步で優勝を逃した悔しい結果を真摯に受け止め、今年こそはチーム一丸となり優勝を目指すという強い決意で練習を重ねてきました。あの状況やプレッシャーを跳ね除けての今年の団体優勝は、今後の体操人生における大きな糧となると思いますが、それ以上に多くの方にサポートして頂きながら試合に出場できる喜びや感謝する気持ちを学べたことは、将来におけるかけがえのない財産になったのではないかと感じております。

2020年はいよいよ東京五輪が開催されます。選手には更なる競技力向上を目指し、同時に体操競技を通じて人間性を高め、東京五輪で日の丸を背負っていく選手となることを目指してほしいと願います。

最後になりますが、千葉県高体連をはじめ船橋市、千葉県体操協会、学校職員、保護者の皆様。選手は皆様のサポートのおかげでいつも気持ちよく演技することが出来ております。選手を代表しまして深く感謝申し上げます。

2 連覇達成

東京学館高等学校 体操部 竹村 英明



静岡インターハイは、8月4日～6日静岡市このはなアリーナで開催された。昨年度団体初優勝したメンバーが3名おり、周囲からも連覇を期待されての出場であったが、実のところシーズンのはじめからケガに苦しめられ、ベストメンバーでの試合が1度もできていない状況で、インターハイの本番によりやくベストメンバーで望むことができた状況であった。従って演技順も現地での調整の結果によって組んでいくという試合前の準備状況であった。

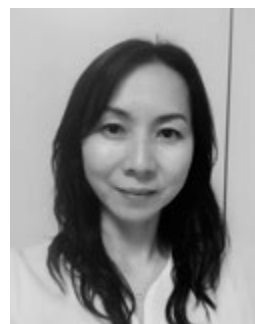
予選は大会2日目の午前、跳馬スタートであった。4人演技のベスト3がチームの得点となるが、ミスが出て、なんとかチーム得点は揃えた。2種目目の段違い平行棒でもミスが出てなかなか波に乗れない状況であった。3種目目も落下があったがベスト3をなんとかキープ。最終種目もミスのある演技で、予選全般を振り返るとチームとして、もたつく試合運びで目標の得点には届かない状況であった。そこまでの予選終了時点ではなんとか1位をキープしたものの、その日最終グループで逆転され、約1点差の2位で最終的に予選を通過することとなった。

決勝は最終班の段違い平行棒スタートで、ミスは出たもののベスト3は予定どおりキープして終了。得点源の平均台では他チームに種目別得点で2点差をつけてようやくチームとしての特色を発揮しての試合運びとなった。3種目目のゆかもミスなしで予定どおり試合が進み、最終種目勝負の跳馬に臨むことができた。ここで予選より難度を上げて、予定得点を3点伸ばす作戦で臨んだ。大会締めくくりの最終種目で会場が見守る中、作戦通りすべて成功し、予定通りの得点を取る事ができた。結果2位に5点差という大差をつけての優勝が決まった。種目別のチーム得点もすべてのチームに勝っていた。勝因は決勝での集中力にあったと思う。2種目目の平均台が終わった時点で、残りの2種目は取り損なわないようにという流れではあったが、最後の種目まで攻める演技を貫き通す事ができたと感じる。決勝の演技順も含めて、試合運びについて選手が考え、試合の緊張感や雰囲気にもまれることなく、自分たちでやり抜く姿勢を貫き通せた結果であると感じた。

振り返ってみると、年度はじめからチームとしての仕上がりに一抹の不安を感じながら過ごしてきた。ベストメンバーがなかなか揃わなかったり、怪我からの回復を見守りながらのシーズンであったが、最大の試合で最高の結果を残すことができた。クラブのコーチであり、今回も監督をお願いした神崎先生の長期的な展望や、試合期間の集中力の高め方に敬意を表す。また、なかなか直らない怪我と不安な状態を、見守っていただいたご家族や、学校で励ましてくれた友人や先生方の支えなく、今回のように競技に臨むことはできなかったと思う。こうした方々に感謝し報告とします。

～全国制覇にむけて～

昭和学院高等学校 新体操部 塩屋 恵美子



『全国制覇』を目標に掲げ挑んだ今シーズン。昭和学院高等学校新体操部は、夢の実現に向け大変充実したシーズンとなりました。

昨年度の全日本選手権（H29年・11月）で3年生が引退し、新チームとしてまず取り組んだのはチームの組織・意識改革です。2年生主導の新チームでは、それまで機能していたものが全く機能しませんでした。各学年でミーティングを重ね、役割を明確にし、報告・連絡・相談を徹底すると共に、生活習慣の確立や風紀面などの確認をしました。また、仲間同士が本音で向き合う関係性の構築に努めました。更に、短・中・長期目標を設定させ、実行させました。また、オフシーズンの中で、トレーニングを見直し、基本的な身体づくりへの取り組みや栄養指導を取り入れ、身体の強化を図り基礎固めが整いました。

4月、新入生も加わり新年度がスタート。インターハイに向けて『初志貫徹』をスローガンに日々邁進しました。技・心・表現に磨きをかけ、昭和学院にしかできない印象に残る演技を目指し日々練習を重ねました。印象に残るためには、技術力は勿論、表現力に磨きをかけなければなりません。そのために団体演技のテーマ曲である『ノートルダムの鐘』のミュージカルを実際に観に行きました。実際に観たことで表現法を具体的に捉えることができ、表現力が増していきました。表現力が増したことで更に思いが増し、相乗効果により動き方や対応能力、集中力も増していきました。また、試合前にはチームで話し合い試合想定練習を組み入れたり、試合の詳細を調べたり、事前に役割分担を考えたりなど、選手が自ら考え、自ら行動することを実践してきました。そして、本番を想定した練習を重ねることで、メンタル向上に繋げることができました。そして、部員、コーチ陣、御父兄が同じ目標に向かい一丸となることで準備は整いました。

いよいよインターハイ（H30年・8月）。今回はBSのNHKが新体操女子団体競技の特番を組むことになり、昭和学院は密着取材を受けていました。取材の中でも選手は全くぶれることなく公式練習をこなし、取材を受けていることも強みに変えて団結する選手達。本番会場に入った直前練習でも楽しむ余裕の姿にチーム力を感じ、手応えを感じていました。本番では『己に勝つ』を合言葉に強気で楽しんで演技することができました。まるでミュージカルを観るようなあの感動は一生忘れません。最後まで己を信じ、仲間を信じて強気で演じてくれた選手達を私は誇りに思います。そして、全国制覇というかけがえのない経験が選手を成長させてくれたと確信しています。

この一年を通して『全国制覇』を目標に部員一丸となり邁進できた日々を誇りに思います。そして、一度しかない本番に全てを懸け強気で戦い抜いてくれた選手達と、支えて下さった沢山の方々に深く感謝しております。今後も歴代の先輩達が築き上げた伝統と誇りを胸に更なる高みである『三冠達成』を目標に日々精進したいと思います。本当にありがとうございました。

2018 彩る感動 東海総体

日本体育大学柏高等学校 レスリング部 森下 史崇



8月3日から三重県で開催された全国高校総体において、私たちは学校対抗戦3連覇を達成することが出来ました。私は昨年までコーチとしてチームを支えてきましたが今大会始めて監督という立場で大会に臨みました。前監督の大澤監督は前任校の霞ヶ浦高校時代から高校レスリング界に金字塔を打ち立ててきた名将でその監督から監督業を引き継いだという緊張感が強かったですが、生徒たちに影響がないよう必死にチームを支えることに専念しました。

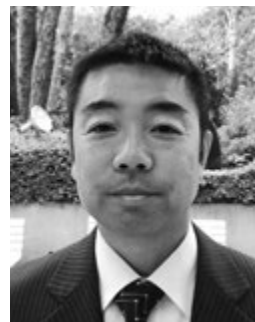
学校対抗戦決勝戦では、春の全国選抜で優勝を争った自由ヶ丘学園と対戦しました。51kg級田南部はまだ1年生で分が悪く初戦黒星のスタートでした。55kg級竹下はチームのキャプテンでポイントゲッターだったが、準決勝ではプレッシャーからか動きが悪く敗戦した不安がありました。しかし決勝戦では力を発揮し、テクニカルフォール勝ちをしました。そのまま勢いに乗りたかったのですが、続く60kg級深田と65kg級山倉は善戦するものの一歩及ばず敗戦しチームスコア1-3と一人も負けられないところまで追い込まれてしまいました。会場の雰囲気の日体大柏が負けるのではないかとという雰囲気がありましたが71kg級山田、80kg級奥井、125kg級宮本と重量級に全国トップクラスの選手が控えていたので自信をもって選手をマットに送り出しました。負けられないプレッシャーからか選手たちもいつも通りとまではいかないが3人とも力を発揮しチームスコア4-3で3度目となる全国高校総体の優勝を達成することが出来ました。

創部4年目とまだまだ歴史の浅いチームではありますが全国高校総体3連覇を達成することが出来たことに自信をもってさらに記録を更新していきたいと思います。当面の目標は前監督大澤監督が成し遂げた11連覇の記録を目標にこれからも日々の練習に励んでいきたいと思います。

最後になりますが、千葉県高体連及びレスリング専門部をはじめ地元柏市など多くの方々のご声援とご支援に心より感謝申し上げます。

創部30周年での3連覇達成

桜林高等学校 少林寺拳法部 土屋 裕嗣



少林寺拳法競技がインターハイの正式種目となり5年。今年度のインターハイは男子団体演武3連覇、そして念願であった男子組演武、女子組演武、女子単独演武での優勝を目指しての大会でありました。

今年の3年生は、1・2年時よりインターハイへ出場し、優勝を経験し活躍していた選手が多く、千葉県総体、関東大会と男女ともに総合優勝し、最高の形でインターハイに挑戦することができました。関東大会が終わり、インターハイまでの約1か月半の期間、男子団体演武は三連覇と春夏連覇を目指し、その他の種目に出場する選手たちも念願であった優勝という目標を叶えるために、大きな重圧を背負いながら、日々の練習に妥協せず、そしてその日その日の自分自身に満足せず、心身ともに追い込みながら厳しい練習を積み重ねてきました。

また少林寺拳法競技は採点競技であるがゆえに、どこかで隙があれば、目標を叶えることはできない。善い行いが成功を導き、悪しき行いが災いをもたらすと事あるごとに選手たちに伝えてきました。そのことを選手たち自らが実践してくれ、学校生活や私生活においても隙を作らず、自らを律するように取り組んでくれました。その取り組みがインターハイ男子団体演武3連覇、男子組演武、女子組演武での優勝という素晴らしい結果に繋がったと感じています。

本校少林寺拳法部は今年度創部30周年を迎えます。記念すべき年に素晴らしい快挙を成し遂げた選手たちを指導者として本当に誇りに思います。またこの30年間少林寺拳法部の伝統を繋いできてくれた歴代顧問の先生方、OBOGの方々、そしてご支援くださる多くの関係各位の方々に感謝申し上げ、共にこの喜びを分かち合いたいと思っております。

今後も多くの方々に応援していただける桜林高校少林寺拳法部であり続けられるように部員たちとともに精進していきたいと思っております。

全国初優勝

秀明大学学校教師学部附属秀明八千代高校 テニス部 鳥谷尾 秀行



夢であったインターハイ優勝について感想を書きます。なにかの参考になれば幸いです。最初に、大会関係者、サポートしてくださった保護者の方、学校関係者、一緒に練習してきた部員、そして選手に感謝します。沢山の人の支えられて、出来た優勝だと思います。力のある選手ばかりでしたが、それだけでは優勝できなかったと思います。例えば、練習コートを探してくださった保護者とコーチがいなければ、ベストを出せなかったでしょう。それにしても、ベストを出すことが出来て、優勝するという事は、大変な事です。私自身の高校時代は、インターハイ三重県予選第1シードでしたが、新入生に負けて、東海大会でも同じ1年生に負けて、ベスト8止まりでした。その1年生がインターハイの準々決勝で、松岡修造氏に負けて、全国で優勝するのはすごいことだと思っていました。(翌年は、その選手はインターハイで優勝しました。)ただ高校生は意外と差が無く、次の大会では、その1年生に勝てました。自身の経験も踏まえて、高校生のテニスの試合は、ちょっとしたことで流れが変わり、番狂わせが起こることがよくあります。このチームは、去年とほぼ同じメンバーで、去年のインターハイ準優勝や関東大会、関東選抜大会優勝など接戦を勝ち抜いてきて、それが自信となり、対戦相手には、プレッシャーとなり、よい結果を生んできましたが、今年関東大会の初戦で、ベストな準備が出来ていなかったのが、敗退してしまいました。このとき、やはり高校生はなにが起こるかわからないと改めて思いました。しかし、これで自分たちが他を引き離して強いのではなく、ベストな状態でなければ、負けるかもしれないという良い危機感が選手に生まれ、インターハイの前に、天狗になっていた鼻っ柱を折られて、シードもつかないチャレンジャーとして、インターハイに挑めることになり、私自身は、良い結果が出るのではと感じていました。3年前のインターハイでは4シードをもらって、初戦で敗退しました。守って守りきれぬほどの実力差はないので、シードとしてのプレッシャーがなくチャレンジャー精神で、のびのびとプレーできたことが良い方向に向かったと思います。炎天下での試合だったので、ダブルスが2勝したことは、とても意義がありました。ダブルスが勝つと、シングルス2は打ち切られるので、大きく体力を温存できました。その結果、決勝で、シングルス2は関東大会個人戦で負けている相手に勝つことができ、チーム全体で成し遂げた優勝だと思います。私が指導者として心がけていることは、選手を甘やかすことではありませんが、選手ファーストで、選手がベストの状態試合に臨めるようにすることです。もちろん選手が高校生として間違っただけをすれば、監督としてではなく教育者として指導します。最後になりましたが、選手には、これからも沢山の困難があるでしょうが、天狗にならず、優勝という自信を持って、また支えてくれている人への感謝の気持ちを忘れずに成長していくことを期待します。

平成30年度総合体育大会カヌー競技優勝について

千葉県立小見川高等学校 カヌー部 可兒 裕太郎



2018 彩る感動 東海総体では、カヌー競技、女子総合優勝を皆様のおかげで頂くことができました。

小見川高校の部員は男子1人、女子4人のわずか計5人ですが、チーム一丸となって全国優勝を目標に日々練習を重ねてきました。彼女達の育った小見川は、小見川海洋クラブ、小見川中学校と小見川高校は地域一体となって小学生、中学生、高校生と続けて練習のできる環境です。彼女達は過去に全国大会で活躍した先輩たちの姿を見ながら、わかりやすく指導してくれる指導者たちに囲まれ、がむしゃらに練習してきた成果がようやく実った、と感無量の思いです。

カヌーは環境と戦うスポーツです。特別なことがない限り雨の日も風の日も炎天下でも行われます。あらゆる天候で対応できるようにと練習もその環境で行われ、いかに自分に厳しく練習できるかという心が試されます。身体は万全の状況でも些細な精神面の問題で実力が発揮できないことはよくあります。そんな中「勝ちたい」と必死に練習し、ストイックにレースに向かう選手の姿はとても頼もしいものでした。私は勝つために応援しなければならないという思いではなく、気がついたら自然と応援をしていたように思います。周囲の応援のおかげで優勝することができましたが、その応援を呼んだのはひたむきに練習を重ねる選手たちの姿ではないかと、思いました。

今年の試合は炎天下の中行われました。去年は台風であり、インターハイは毎年心と技術が試される環境であったと思います。女子カヤックシングルでは諏訪智美が3年連続優勝の選手に0.2秒差で食らいつく好試合を行い、周囲を沸かせました。女子カヤックペアでは柳堀あいりと高野真緒が決勝5位、高野真緒は去年のインターハイで一年生ながらに女子カヤックシングル2位の成績でしたが、今年はペアへの挑戦でした。あと一息であり、別の全国大会では優勝するなど、ここでは惜しい戦いをしました。女子カヤックフォアは柳堀あいり、高野真緒、諏訪智美、高橋星菜と中学校の頃から固定したチームです。それぞれの特性が似ているのではなく、性格も漕ぎのスタイルもバラバラの四人ですが、試合にこだわる姿勢は人一倍強いと感じます。結果は2位で、今年は女子カヤックフォアで優勝を狙おうと目標をたてて練習に打ち込んできただけに、とても悔しい思いをしました。上記のように女子総合優勝を頂いた物の、各種目で優勝した種目はなく、まだまだ上を目指すことができます。彼女たちはまだ2年生。来年のインターハイでは完全優勝を狙って有終の美を飾りたいと思っています。

ここまで導いてくれた関係のコーチ、ご家族の方々、地域の方々、関係の先生方本当にありがとうございました。彼女たちのさらなる飛躍と向上のために、これからもどうぞよろしくお願い致します。